こころの絆

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こころの絆

【Ｎコード】
Ｎ５９１０Ｔ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
『身分不相応』な結婚をした主人公　華絵。
彼女に無意識に刻み込まれた記憶と、『何か』がこころの絆を通わせる。
今回は、複数どんでんがえしの『禁則』を破ってみました。
実験です。
【華】

1

貧しい母子家庭で育った里藤華絵（りとうはなえ）は、彼女の勤める会社の上司の紹介で知り合ったエリート社員　華形満夫（はながたみつお）と、この夏に半年間の付き合いが実を結んでゴールインした。

満夫の家庭は両親とまだ独身の妹四人の七人家族で、父の満太郎は国内に約千五百拠点、国外に百を優に超える関係子会社を傘下にする大手ソフトウェア企業の専務取締役であり、華形家は東京都世田谷区の一等地に三百坪を超える豪邸を構えている。二人が付き合いを重ねていた頃は何らの問題もなかったが、結婚後、『華形華絵』となった彼女は、その名前の違和感と同様に、育て上げられてきた家庭環境での違和感が日増しに露呈してきて、夫の救いの手もないまま家庭内で完全に孤立の一途を辿っていくようになっていった。

華絵の家庭は貧乏ながらも、母の熱意と努力の甲斐あって彼女は大学院まで進学させてもらい、満夫の勤める上場企業の秘書室に採用され彼と知り合うことになった。それまで精神的に目一杯の背伸びをしてきた華絵にとって満夫との出会いは、ぎりぎりの背伸びであって、彼女は結婚により、もうこれ以上の背伸びはできないことを自らようやく知らされる羽目になった。

華絵に対する姑の露骨な意地悪もさることながら、特に彼女にとって耐え難かったことは、一歳年下の長女、恵を頭とする四人の妹たちであった。彼女らは母に倣って執拗に華絵に対する嫌がらせを繰り返した。

「ねえ、恵さん。洗濯機に入れた私の肌着、どこへいったか知らない？」

「知らないわよ」

「今朝一緒に入れて洗濯機回してたんだけど、終わったら見当たらないの」

「ええ？　あれって下着だったの？　てっきり雑巾が入ってると思って捨てたわ」
　ゴミ箱を見ると、生ゴミの下に華絵のショーツとブラが埋もれている。しかも、イカのワタが破け散って華絵のショーツにシミとなって広がってしまっている。
「やだあ。捨てないで。はくものなくなっちゃうじゃない」
「あら。お義姉さん。まさかそんなシミパンまた洗ってはくワケ？　そんな訳ないわよね。それとも、お兄さんにそのままプレゼントしようっての？　お下品ね……」
「何てこと言うの！？　いくらなんでもそんな言い方ってないと思うわ」華絵の精一杯の抵抗だ。
「何よ。喧嘩ふっかける気？　私なんかね、リグビー・ペラーか、ラ・ペルラ以外、下着と思ってないのよ。お義姉さんとは全然違うのよ。一緒に住んでるからってつけ上がらないでね。ああそうだ、お義姉さん。あなたお尻おっきいからステテコの方が似合うんじゃないかしら？　はは」
「！！……」

2

嫌がらせの手口は至って子供じみたものであったが、毎日違ったパターンでたて続けにやられるとさすがに華絵も滅入ってしまう。
食事は華絵が主に担当することになっていたが、出来上がった料理に対する非難は毎回歯に衣を着せないものである。
あるときなどは、口をつけただけで皆で外食に行かれてしまったこともあった。

「何これ。キャットフードか何か入れなかった？」と次女の薫。
「入れてません！」華絵も常に黙っているわけではない。
「うそうそ。ゼッタイ入れてる。じゃなければレシピが猫のエサだったに違いないわ」
すると姑がたしなめる。
「薫。我慢して食べなさい。華絵さんは料理がへったくそなだけなんですから。それにビーフストロガノフなんて食べたこともないんだから、ましてや作れる訳なんてないでしょう」

――我慢して食べなさいって何よ！　それって、全然フォローしてないじゃない。

「私は嫌よ。こんなまずいもの食べられやしない。角のフレンチレストランに行って食べてくるわよ。さあ、みんな一緒に行こうよ」
妹たちだけで出掛けるかと思いきや、姑までもが一緒になって出掛けてしまうので、あとに残された夫の満夫はそわそわしだし、遂には華絵を一人家に残して出掛けてしまう。
すっかりお酒が入って上機嫌で帰ってきた夫に華絵は口調を強めて言う。
「あなた。酷いじゃない。私、こう見えてもじっと堪えているのよ」

「ああ。ヒック。そりゃあ当然だろ。ヒック。おまえが一番年上なんだから」

3

華絵はアパートの借間の実家で母とともに永年一緒に暮らしていた愛猫を夫の実家へ連れてきていた。　猫の名前は『サバンニャ』。オス猫である。たてがみのようにも見える首の周りの長めの毛とその色が、サバンナに棲むライオンに似ていることからそう命名された。

サバンニャはまだ目も充分に開かないほどの生まれたばかりの頃、段ボールに入れられアパートの階段に捨てられていたところを華絵に拾われ、以来十年間華絵が大事に育ててきていた。

多くの年老いた家猫が晩年に近くなって患うのは膀胱炎である。サバンニャも多くの猫と同じように半年ほど前から膀胱炎を患っていた。その場合、段々と『おしっこ』が定められた猫砂のトイレでできなくなってきて家のあちらこちらでたれ流し状態になってくる。そんな訳で、体の弱い母に猫の世話と雑巾掛けを任せておくのは大変だろう、と思い、華絵はあえて寂しがる母を背に猫を連れてきた。

このところ、サバンニャのたれ流しはいよいよ本格的になってきて、サバンニャは華絵と一緒に苛められたりお腹を蹴られたりすることが多くなってきた。サバンニャは調子が悪くなると床に伏せたままお尻を上にあげてぶるぶると左右に腰を振る癖がある。華絵はその格好を見ると、可哀そうにと思いつつも可笑しくなって自分自身を笑わせることが出来た。嫁入りしてからほとんど笑顔を忘れてしまった華絵にとって、唯一の笑いが愛猫サバンニャとのひとときだった。

「みゃあ」サバンニャが華絵の目を見て鳴く。

「みゃあ」華絵も真似をして鳴く。

たったそのひとときが華絵の笑顔の間であった。

あるとき華絵はふざけてサバンニャのまねをして床に伏せ腰を左右に振っていると、突然床に激しい音と振動があった。
ばっし――ん！
驚いて華絵が振り向くとそこには満夫の父、満太郎が立っていた。
「誰？　ひょっとして、おっ、お義父さま？　ええっ？　何ですかその格好は？」
その姿は華絵にとって、いや、普通の人間にとって俄かに現実とは信じがたい格好だった。頭には女性用のカツラを被りその上に兎の耳をつけたバニーガールのような姿。もちろん足は黒の網タイツだ。真っ赤な口紅は唇からはみ出し、その表情は怪しく口角を上げている。手にしているものは玩具のような小さめの鞭のようで、どうやらそれを床に強く打ちつけたようだ。
「あーら。華ちゃん。あんまりお尻振っちゃダメ。華形家のお嫁さんはもっとおしとやかじゃないとね」と満太郎。
――！　お義父さんがおねえ系！？　まっ、まさか。いったい何がどうなってるの！
「驚いた……。お義父さん。悪ふざけはやめてください。何のおつもりですか？」
「大丈夫よん。今日は優しくしてあげるから。子猫ちゃん」
華絵はぶるっと身震いがした。
――おねえ系のレズビアンなんて聞いたことない……。
満太郎は兎の耳の被りものを華絵に差し出して言った。
「それ被って鳴いてごらんなさい」
華絵は兎の鳴き声とはどんな風だったか考えたが、思い浮かばず目を白黒させた。満太郎は急に激しい男口調でどなった。
「こら！　早く言うことをきいて鳴くんだ！　『みゃあ、みゃあ』

って鳴け！」

――ええっ？　みゃあ？　この耳、猫じゃないしっ！

「みゃあ。みゃあ」

華絵はいわゆる『天然』である。どうしていいかもわからず、とりあえず鳴いた。

「おっ、その顔。その顔がいいわね。蛇に睨まれたカエルのような顔」

華絵はさらに呆気にとられ、目が点になり思考回路を停止した。

――蛇に睨まれたカエルのような顔って。普通のカエルの顔といったいどこが違うって言うのよ。

満太郎は華絵の心の中を見透かしたように、にやにやと気持ちの悪い笑い顔を浮かべながらさらに異常とも思える言葉を口にした。

「私はね。最初はね。追い詰められた恐怖の表情がとっても好きだったのよ。ところが、人間と違って、動物は追い詰められても決して恐怖の表情を見せないのよね。ほら。鹿やシマウマが猛獣に追いかけられて食べられそうになっても表情ひとつ変えないでしょう？　でもね。それはそれでまた快感になってきたのよね。ふふふ。あなたは追い詰められてもあんまり恐怖の表情を見せないから好きよ」

「何のことか私にはさっぱりわかりません」

「そう。それじゃあ、教えてあげるわね」

「教えていただかなくて結構です。そんなこと……」華絵は即座に言葉を返した。

満太郎は目を吊り上げた。華絵は、しまった、と思ったが、この状況では開き直るほかはなかった。

「あなたも役員秘書のはしくれなら、経営書の一冊や二冊読んでるでしょう？　イノベーションってどういうことか知ってる？　イノ

ベーション、すなわち改革とは、新しい満足を生み出すことである。ふふ、わかる？　新しい満足って……」
華絵は役員に回覧される経営関係の雑誌やベストセラー本は大抵無理やり読まされているのでピンときた。
――ピーター・ドラッガーの『マネジメント』に出てくる言葉だ。満足の意味を完全に取り違えてるよ。この人……。
満太郎はさらに続けた。
「正義について熟慮する、その気持ちに表れる人格こそが正義である。それは自らの重荷を意識して生きるということなのだあ」
華絵はまたピンときたが、逆に訳がわからなくなってきた。
――たしか、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の言葉だ。
満太郎はおもむろに大きめなリュックサックを引きずってきた。まるで石でも入っているかのようにかなり重たそうである。
「さあ、新しい満足を教えてあげる。まずは服を全部脱いで、自分をさらけだすのよ！　そして……」
「そして？」
満太郎はリュックを指差した。
「この重荷を背負いなさい！」
「ぶうっ！」
――ウチの会社の親会社の専務よ。こんな人に経営任せていて、ホントにウチの会社大丈夫なワケ？

4

我慢に我慢を重ねてきた華絵の堪忍袋の緒を切ったのは三女の妙子だった。

「ねえ。猫のサバンニャが見えないんだけど、庭へ出て行ったのかしら。あなたたちどこかで姿見かけなかった？」
「ああ、あのボロ猫ね。見たわよ。ていうか、獣医さんに渡しといたわ」と妙子が言う。
「どういう意味？　獣医さんが往診に来ることなんてあるの？」
「あるわよ。マルチーズのマシュマロンの定期健診よ。マシュマロンは西ヨーロッパチャンピオンのエンシャント・シーカー・ダンサーの曾孫よ。お義姉さんに変なもの食べさせられて病気にでもなったら大変だからね」
「ちょっと待って。私がいつドッグフード以外の食べ物与えたってのよ！　あのね。そんなことより獣医さんがサバンニャを連れて行くって言ったの？」
「いいえ。ボロ猫のやつ、私の靴におしっこしたから引き取ってもらったのよ」
「引き取ってもらったっていったいどういうことよ！」
「どういうことも、こういうこともないの。持ってってもらったのよ」
「どこの獣医さんよ！　私のサバンニャを取り戻すから！」
「どこだったかなあ。なんせ獣医は三軒かかってるからねえ、ええっとねえ……。忘れた。はは」

華絵は遂に手を出した。妙子の長い髪に掴みかかろうとした。ところが悪いことに三女の妙子は四人の妹の中でずば抜けて体格が良く、高校時代には女子柔道部の主将だったのだ。

華絵は逆に襟首を掴まれて、綺麗に巴投げを決められ、三メートルほど先のフローリングの床に背中から激しく叩きつけられた。受身を知らない華絵は、同時に頭も床に強く打ちつけた。

「痛あ――っ」

華絵は俄かに立ち上がることもできず、戦意を喪失した。脇で見ていた四女の美智子の笑い顔と対照的に彼女は表情を歪めた。

その後、華絵は世田谷区内の動物病院へ片っ端から電話し、サバンニャの所在を確認してみたが、どこの病院も心当たりがない、とのことだった。

――この家の人たちはみんな完全に異常だ。異常なのは私の方じゃない。ゼッタイに。

そう思いつつ、しかし、今の彼女に出来ることは何もなかった。

――例えば満夫と離婚したら自分はどうなるか……。

華絵は今の会社を辞めさせられるに違いないと思った。将来はエリートとして、父、満太郎が経営し専務を務める大企業の役員にまで昇りつめるということがほぼ約束された満夫にとって、別れた妻がその企業のグループ会社で今の自分と同じ会社にいることなどあってはならないことだ。

華絵には何の欲もなかったし、今の会社への未練などもほとんどないが、上場企業の正社員としての職を失うことは、たちまち体の弱い母とともに路頭にさまようことになるような気がしてひたすらそれを懼(おそ)れた。優秀な弁護士事務所をいくつもかかえる華形家を相手に慰謝料など請求することなど到底出来るはずもないし、会社を辞めさせられた上、逆に家系の名誉のために悪者にされ慰謝料を請求されて、身ぐるみ剥がされてしまうのがオチである。

八方塞がりの状況の中、華絵は感情を失ったロボットのようにマイペースで言葉もなく暮らすようになっていった。姑や四人の妹たちは、何を言っても、何をしても唯々無反応な彼女を次第に相手にしなくなり、父、満太郎との週一回のお相手も無表情にこなして、あたかも平和が訪れたかのようにも見えた。しかし、華絵にはまだ僅かな人の『こころ』が残されていた。

――このままではいけない……。

ある日、華絵は夕食を済ませた後、電車に乗り一人で夜の新宿へと向かっていた。彼女は、完全に人の『こころ』を失う前に、それを取り戻したい一心で彼女なりに必死になっていたのである。

5

平日夜の新宿の繁華街は、サラリーマンやＯＬ，学生やらでいつものとおりごったがえしていた。華絵は会社では役員秘書として仕事を無難にこなしていたが、一般社員の出入りや会話がほとんどない静寂な役員フロア内で、ビジネスに係る言葉以外ほとんど話すこともないため、彼女にとって人間的な感覚が仕事によって得られることはまったく無いに等しかった。

そんな中で、たとえ知らない人間であっても仕事後に精神的に開放されたサラリーマンやＯＬ、自由気ままな学生たちの振るまいを目にし会話を耳にして、華絵は自分はまだ人間の世界に生きていることを自覚し、ほっとした。

華絵は、特段行くあてもなく人の多いところへとファストフード店へ入っていった。順番を待ってフィッシュバーガーと飲み物を取り席に着こうとしたとき彼女は知らない男性に話しかけられた。

「あの。　間違えててりやきバーガーを注文してしまって……。私、甘いの苦手なんで買い換えるんですが、もしよかったらこれ、もらっていただけませんか？」

華絵が男の方へ目をやると、長身のハーフっぽいイケメン風な青年が紙に包まれたバーガーを彼女の方に差し出していた。華絵は二つも食べる気はなかったが、人間の温かいこころに触れて急に元気になり、笑顔になった。

「ええ？　いいんですか？　いただいちゃおうかな。ありがとう」

その後その青年は別なセットメニューを購入して再び華絵の所へ来て、彼女へ話しかけてきた。どうも、一人で来ていたとみえて、「お一人ですか？」と言い、華絵が頷くと彼女の向かいの席に座った。

彼は若い割に饒舌で、かなり女性を扱い慣れているようだった。

それもそのはず、この界隈にある、クラブのホストをしていると言う。やや高級感のあるそのホストクラブの客層は、ちゃらちゃらっとした若い女性でなく、落ち着いた金持ちの主婦が多いと言う。華絵は決して『落ち着いた』という感じではなかったが、一応金持ちの主婦の仲間入りをしていた訳で、どうも華絵の持っている高級ハンドバッグや両手の指二本ずつにはめられた指輪が、ホストであるその青年の目にとまったらしい。彼は実際に話の中にハンドバックと指輪を話題に出して、華絵を誉めちぎった。注文を間違えたというのは、どうやら最初から計算されていたものに違いなかった。

青年は、兎にも角にも人恋しくて仕方がなかった華絵に巧みに話を合わせ、すっかり気分の良くなった彼女を自分の勤めるホストクラブへ連れ込んだ。

6

店の入り口には立派な二頭のオスメスライオンの剥製が置かれてあった。構えからして見るからに高くつきそうな店である。案の定、照明をおとした薄暗く広いフロアにはいかにも金持ちそうな奥様が若い二～三人ずつのホストを相手に談笑をしている。

この種の大概の店では、ホストが指名をもらうとその客と応対している時間は時間給が二倍から数倍に跳ね上がるなどの歩合制を採っている。同伴で店内に入るということは、当然ホストが指名をもらったことになっていて、ルックスに自信のあるホストであれば、店の外から金のありそうな客を釣り上げてくるのが収入を増やす一番の近道である。

ところが、その日青年は自分が指名を受けたことにせず、華絵が他のホストを指名してきたことにした。

「紹介しよう。店では僕の弟分のピロミクンだ。綺麗な顔をしてるだろう」

確かに整った顔立ちをしているが、華絵には今ひとつ華やかさに欠けるように思えた。

「年はおいくつ？」

「二十五歳です」

ピロミクンとやらは、笑顔で応えた。顔は間違いなく笑顔になってはいるが、表情そのものに嬉しそうな感じが全くうかがわれない。しかも口ベタで、華絵は彼がどう考えてもホストに向いているとは思えなかった。

「こいつ無表情な男だけど、意外とかわいいところあるんだよね」

すでに青年は華絵に対してタメグチになっている。

「へえ。どんなところ？」

「こいつには夢があるんだよ。なあ、ピロミ。このお方へお前の夢を聞かせてあげてごらん」

そう言って青年は席をたち、ごめん、と一言。ボックス席は華絵とピロミクンの二人になった。
「ねえ。あなたの夢って……」
ピロミクンは頷くとやっと自分から話し出した。
「僕は映画俳優になりたいんです。だから話し方や表情の作り方を学んでおこうと思ってここへ来たんです。あとですね、僕は占いの勉強もしてます」
「へえ？　大きな夢ね。がんばってね」
「はい……」
話がちっとも続かない。ときどき夢を頭に描いているのか、ぼうっと天井の方を見ながらますます無口になっていく。華絵は一生懸命話題を彼に合わせてあげるが、受け答えする彼の方にまるっきり覇気が感じられない。こうなると、どっちが客なのかわからない。
「ねえ、お店の入り口にあった立派なライオン。あれ、本物の剥製でしょ？」
「そうです。以前お店にきてくれていたお客さんがプレゼントだってくれたそうです」
――まあ。すごい。あれ、きっと何百万もするわよ。ううん。今どきは保護されて密猟に違いないから、ン千万かもね。
「まるで、生きていて今にも動き出しそうね」
「ええ……」また、会話が途切れる。
華絵は呆れたが、顔に出さず努めて笑顔をつくった。人間らしさを取り戻そうとして出掛けてきたのに、これでは何のための行動かわからない。少しのワインをたしなみ、オードブルを軽くつまんで小一時間ほどして、華絵は店を出ることにした。
料金は予想していた通りかなりのものだった。たった小一時間で、ほとんど飲み食いもせず、お代は八万円だった。これでは、普通の女性はおろか、結構な金持ちでもそうそう来ることはできない。華

絵はカードで支払いを済ませ店を出た。
歩き出してふと気配を感じ振り向くと、そこにはピロミクンがいた。
「あなた、お店は？」
「店長が、今日はお店はいいからあなたに付いていけって」
「まあ……」
そのとき華絵は、無表情に棒立ちになっているピロミクンに対して不思議な魅力を感じた。
笑顔をなくしていた自分と、無表情の彼。しかし彼は夢を持っている。華絵はこのピロミという青年の夢を叶えるために自分ができることを何かしてあげよう、と思った。
――そう。それが、私の夢にもなるかもしれないわ。
華絵はピロミクンの腕に自分の腕を絡め、彼の体に身を預けながら歩き出した。彼の手のひらは予想に反して温かかった。

7

華形家の居間は畳に換算すると約五十畳ほどの大きな部屋である。天井は中二階の天井まで吹き抜けになっていて、居間にあるテレビの音声は映画館のような迫力を創り出す。テレビといっても備え付けられたプロジェクターがスクリーンに映し出すもので、型で言えば三百インチほど、とでもいったところであろうか。

そのテレビではスポーツチャンネルでサッカーの一コマが実況中継されていた。

実況「スペインのコーナーキックです」

実況「シュパーン、ぴっぴ、シュバー、ブーン、ばーん、ズバーン」

実況「ライオンみたいな男のシュート決まったあ！」

解説「スペインのライオンみたいな男。やりましたね」

実況「頭、もじゃもじゃのライオン、ライオン、すっごい！」

実況「以上、現地より中継でお送り致しました」

「……ライオンみたいな男？　いったいどこの誰なんだ。まったく実況アナウンサーのレベルも落ちたな」

華形満太郎が、「消す！」と言うと、テレビのスイッチがぷつんと切れた。音声認識である。

「華絵はまだ帰らんのか」

夕食後に出掛けること、すなわち奥様の夜遊びは、かつて満太郎の妻もまだ若かりし頃、頻繁に行っていたことなので、華絵が夜遅くに外出することに対して華形家として特に禁止する理由はなかった。

昨夜金曜日の夕食後、華絵が外出したことを満太郎は承知していたが、無断で外泊した上に丸一日経っても夫の満夫へ電話の一本もないのは異常なことである。

「お父さん。警察はまずいから、専属の探偵社を総動員して捜索しましょうか」
「いや待て。華絵は腐っても華形家の嫁だ。変な趣味でも暴露されたら家系に瑕(きず)が付く。探偵の調査員だって所詮人の子だ。信用ならん」
「お父さん！　変な趣味って、まさか。母さんが若いとき夜遊びしたっていうのも、お父さんが変な趣味を覚えさせたからだっていうじゃないですか。そういえば最近の華絵はどうもおかしい。お父さん。変な趣味は外で金払ってやってくださいよ！」
「俺は知らないよ。もともと華絵になんか興味の欠片もない。華絵の尻がでかかろうが、胸がどうであろうが、唇が色っぽかろうが、うなじにほつれ髪がどうのこうの、そんなこと俺にはどうでもいいことだ」
「……それって、ホントに興味ないのかなあ」

8

土曜日の夕方。小雨が降りしきる中、華絵は地図を片手に渋谷にある小さなスタジオへ向かっていた。

ピロミクンを含む数人の俳優を目指す青年たちがスタジオで即興の演技をくりひろげ、関係者がビデオや写真を撮るという企画だ。一部のネット上の会員にはその様子がリヤルタイムに配信されるという。

五階建ての小さなビルは大通りから路地裏へ入ったところにあった。少し上のほうに入口があり、外階段があった。華絵が上がってガラス張りの玄関から中を覗き込むと廊下に長机が置いてあり『受付』と書いてある。トイレらしきところからちょうどスタジオに入ろうと若い男が出てきてガラス越しに華絵の姿を見つけた。男は扉を開いて少し怪訝そうな顔をした。

「撮影会に御用ですか？」

「はいそうです」

「ここへ名前を書いてください。料金は千円です」

受付を済ませてスタジオに入ると十人ほどの青年が愛想良くカメラに向かってしゃべり掛けていた。見物している者も十人くらいだ。しかし見物客は全員十代くらいの若い女性で、華絵は皆の視線を一斉に受けた。華絵は三十歳。やや童顔なので見方によっては二十代前半くらいに見えないこともないが、服装はごまかせない。思いっきり『主婦です』というような格好だ。

脇に膝をついて出番を待っているピロミクンの姿が見えた。彼はすぐ華絵に気付き、目を細めた。相変わらず感情が入っていないロボットのような表情だ。

ついにピロミクンの出番になった。彼の仲間は三人である。ところが話しているのはピロミクン以外の二人ばかりで、無表情のピロミクンは完全に浮いてしまっている。いや、浮いているのならまだ

いい。存在感がほとんど無くなってしまっているのだ。
――引いてちゃダメだよ、ピロミクン。何か言わなくっちゃあ。
華絵が身を乗り出してジェスチャーをしていると、音も出していないのにカメラマンが『しーっ』と言うように唇に指を当てて不愉快そうな表情をした。華絵はシュンとなり思わず小さくなった。
ピロミクンは美形である。しかし、その周りにはしらけ鳥が飛んでいる……。
最後は、一人ずつ、お菓子を食べてそのおいしさをアピールするコーナーのようだ。次々とギャグを飛ばしながら、体も目一杯動かしておいしさを表現する青年たち。
ピロミクンは？
ピロミクンの番になった。彼は引きつったような笑顔で一言感想を口にした。
「ナイステイスト！」
何度も言うようだが、ピロミクンはイケメンな今日の出演者の中でも上から三番目くらいには入るような美形である。しかし、セリフは最低、表情も最悪、演技はどっちらけである。
華絵は悔しくて悲しくて、そして一生懸命なピロミクンが可哀想で涙がこぼれそうになってきた。
――ピロミクン。あなたはどうしてもっと前に出るように頑張れないの？　お願い、神様。彼を何とかしてあげて。
休憩になったので、華絵はもう帰ることにした。するとピロミクンは廊下へ出てきて彼女へペコリとお辞儀をした。
「華絵さん。本当にありがとう。僕、嬉しいよ」
顔が全然うれしそうではない。しかしその言葉が一生懸命な彼の精一杯の気持ちを表していた。

9

翌日の日曜日。

華絵は前日も家に帰らず、ホテルに宿泊した。無断外泊の二日目である。さぞかし皆が怒っているに違いない。帰ったらどんな凄い嫌がらせや、酷いお仕置きが待っているか、華絵には想像も出来ないほどだった。しかし、今の彼女の頭の中はピロミクンのことで一杯だった。

その日の夕方、華絵はピロミクンとイタリアレストランの入口にいた。華絵は超高級なレストランでのフルコース料理やマナーなども彼に経験させてあげないと、と思い、敢えて彼に行ってみたい店を選ばせて代金は華絵のカードで支払うつもりだった。

いい雰囲気のお店だと感じて二人で店内に入り、席に着いてメニューを見ると、『一九八』という数字が見えた。

――ひとり一万九千八百円のコースか……。ちょっと高いけど奮発しちゃおうか。

華絵は、彼の選んだ店だ、つべこべ言わずに好きにさせてあげよう、と思った。

ところが、次の瞬間、華絵はメニューの数字に目を丸くした。そこには¥一九八〇　と書いてあった。

――フルコースディナーで二千円？　たった？　どうなっているの？

今の会社へ就職するまで貧乏の極みだった華絵にとって、二千円は一食の金額として決して安いものではない。当時の自分ならば高すぎて手の届かないところである。

一転、結婚してからは頻繁に高級レストランで外食をとるようにな

ったが、フルコースのディナー料理でたったの二千円などというのは見たことも聞いたこともない。最低でも五千円くらいはかかる。
メニュウは案の定だった。イタリアンのフルコースといいながら、前菜は胡瓜の酢のものにバターピーナッツである。胡瓜とピーナッツでは全然合わないし、だいいち料理の手間はほとんど掛かっていない。メインの肉料理はごく普通の豚肉のしょうが焼きのようである。しかも量だけは妙に気取っていて、一口で食べられるほど少ない。魚料理は、サバの味噌煮そのものだ。しかも煮込み過ぎていてフォークでは崩れてしまって手に負えない代物である。デザートに至ってはジュースを凍らせたようなキャンデーだ。
すっかりしょぼくれてしまった華絵は、ピロミクンの顔を見て思わず反省し自分を恥じることになった。
ピロミクンは至って満足げであった。表情にはほとんど表れていないが、華絵はもはや彼の微妙な胸の内を何となく感じられるようになっていたのである。

――あなたには何もかもが満足に感じられるのね。素直で純朴な人。ごめんなさい、ピロミクン。私が間違っていたわ。

デザートを食べながらピロミクンは珍しく自分から話題を切りだした。
「華絵さん。僕ね。実は映画に出たんだよ。草原の輝きっていう映画。知ってる？」
そういえば、昨年の秋口にプチヒットした邦画として華絵の記憶の片隅に残っている。
「ああ、知ってるわ。見なかったけど、たしか遠距離恋愛の純愛映画って聞いてた。すごいじゃない。どんな役で出演したの？」
「ラストの教会での結婚式に列席してる人」

――そうか。やっぱりね。エキストラね。

華絵はそう確信したが口にはしなかった。その代わり少しの期待を胸に一言だけ確認した。
「列席者って家族か親戚の人の役？」
「ううん。特に決まってない」

――完全なエキストラだ。

「そう。出演料は貰えるんでしょ？」
「うん。二千円もらった」
ピロミクンは嬉しそうである。例によって感情を顔に出さないが、そわそわしている様子が何となくそう感じさせている。華絵は本人が喜んでいるのに自分の方ががっかりしたような顔つきをしてはいけないと思い、精一杯の笑顔をして見せた。それを見たピロミクンは「頑張るぞ！」と言いたげに大きく頷いた。

10

明日の月曜日は華絵の会社の親会社、つまり華形満太郎の会社の創立記念日である。国内の関係子会社、孫会社ではそれぞれの会社と親会社の創立記念日の両方が公休日となっている。

華絵はそのことを思い出して、よし、明日は休みだから今晩はピロミクンとお互い寂しい者同士で朝まで楽しくやろう、と心に決めた。そうなると無断外泊三泊目になってしまうので、さすがに華絵は夫へ連絡を入れることにした。

姑や妹たちには何を言われてもだんまりを決め込むつもりでいたが、満夫が何と言うかが気に掛かることと、なんと言っても、満太郎のお仕置きを一番に怖れていた。彼の言う『重荷』はとてつもないものを用意されるような気がしていたのだ。

華絵は電話に出た満夫に対して、開き直ったように言った。

「もしもし。私、華絵です。無断で外泊してしまってすいません。ついでにもう一泊させていただきます」

「おまえ。今すぐ帰ってこい。今なら許してやる。親父の怒りも俺が抑えてやる」

「明日、昼ごろ戻ります」

「ダメだ。無断で三泊はウチの家系でも例がないことだ。そうなったらお前はここには居られなくなるかもしれない」

「てことは、二泊までは無断外泊の例があるってことですね。では、私は今連絡しているのですから、今晩は無断ってことにはなりません。二泊です」

「むうぅ……。へ理屈をこねやがって。ただじゃすまさんぞ」

「私をどうなさると言うのですか？」

「うう……。それはまだ、考えてない……」

――優柔不断なマザコンの男……。

「それでは、お義母さまに相談されて、決まってから連絡くださいね。無断外泊経験がお有りのお義母さまに。それでは……」

プツッ。ツーツーツー。

「！……」

11

華絵は近くに見えていたカラオケ店にピロミクンを連れて行った。日曜の夜だというのにそこは満室で一時間半待ちの状態だった。仕方がないので、華絵は一応予約を入れて、同じビルの一階にあるスナックバーでお酒をたしなみながら待つことにした。

そのスナックバーは中に入ってみると既に充分酔いの回った先客でごった返しており、店の中は大盛り上がりであった。

「おう。ねえちゃん。ちょうどいいときにきたねぇ。おや？　後ろにいるのは……。年下の彼氏かい？　いい男だねえ」

――まいったなぁ。これじゃあピロミクンと落ち着いて話もできやしない……。

◆◇◆

既に店に入ってから二時間弱が経過していた。カラオケ店で予約した時刻もとっくに過ぎてしまっている。

店のカラオケのモニターテレビの前で激しく踊る女。そうとう酒が入っている様子で顔がすっかり上気してしまっている。あまりに激しく動いているので髪は汗でぬれて水をかけられたように乱れている。やや短めなタイトスカートはただでさえふっくらとしている腰の動きに耐えることが出来ず、ファスナーの上のフックは既に弾け飛んでブラウスがだらしなくスカートから躍り出てしまっている。店の客は手を叩きながらやいのやいのと盛り上がる。

『ダンシングクイーン』もどきの女は華絵だった。

「いいぞ、いいぞ」「テーブルの上で踊ってよ―」「ははは、愉快愉快！」

カウンターでは、華絵の動きとは対照的に、一人の青年、ピロミ

クンが静かに酔い潰れていた。華絵もピロミクンも、普段から羽目をはずして飲むことはほとんどない。二人とも他の酔客におもしろおかしく次々と酒や焼酎をご馳走になって、とうとう彼女の方は皆の酒の肴になり、ピロミクンは一気に潰されてしまった。

「もしもしお客さん」

華絵はいつのまにか寝てしまっていて、店の板前さんに揺り起こされた。

「もう電車なくなっちゃいましたよ。今日はお客さんも帰っちゃったし、そろそろ店をしめようかと思ってるんですけどねえ」

周りをきょろきょろと見回す華絵。ピロミクンは相変わらずカウンターで腕枕をし、よだれを少し流してぐっすりと眠りについている。

店の勘定は、他の客が二人の分まで支払ってくれたという。

「あの。すいません。タクシー呼べませんか？」

「終電終わっちゃったから、もう無理ですよ。空車は皆駅のほうに回っちゃってます。かなりの遠距離なら回してくれるかもしれませんが……」

「遠距離です。二万円くらいかな。いえ、三万円かも」華絵は適当に言った。

しかし華絵はピロミクンを置いて一人でどこかホテルへ行く訳にはいかない。彼女はピロミクンの背中を揺すって起こそうとするが、彼は起きる気配すらない。相当に酒が入ってしまっているようだ。彼女は彼に本当に済まないことをしたと反省した。

ふと見るとピロミクンの持っていたセカンドバックが開いていて中に手帳が見える。華絵はその手帳を手に取り中を見てみた。手帳の最後には名前のない住所が一つ書いてあった。その下には携帯の電話番号が書いてある。

――ピロミクンの携帯番号だ。

そうなると、その上の住所は彼の住所に違いない、と華絵は思った。

店の人に手伝ってもらいピロミクンをタクシーに乗せ華絵は自分も乗り込んだ。

12

住所の示す場所は横浜市の繁華街からずっと離れた閑静な住宅街のはずれの辺りだった。その家は、華形家に負けじ劣らすの大邸宅だったため、ぴったりの住所はその家一軒だけだった。

――ええっ？　あんなに貧乏そうにしていたピロミクンの家が、なんでこんな豪邸なの！？

タクシー代は一万円ほどだったが、華絵は二万円を渡し運転手さんにピロミクンを抱きかかえて玄関まで運んでくれるように頼んだ。運転手はピロミクンの小さめな体格を見て快く引き受けてくれた。華絵はピロミクンを送った後、また車でホテルのあるところへ引き返さなければならないので、もう一万円を前金として渡し、しばらく待っていてもらうよう運転手に頼んだ。

表札には『大村』とだけある。しかもその『大村』の字がたいそう威張っている。ただ者ではなさそうだ。

呼び鈴を押すとすぐにタキシード姿の初老の品のいい男が出てきた。こんな真夜中なのに寝間着ではないことに華絵は少し驚いた。

その男は玄関の外に酔い潰れて寝そべっているピロミクンの姿を見ると、すぐに抱きかかえて少し足を引きずりながら玄関の中へ入れ、続けて玄関へ出てきた男へ毛布を持ってくるよう指示した。

執事は毛布をやや無造作にピロミクンへ掛けて、徐に華絵の方へ顔を向けた。顔には何本も深いしわが刻み込まれている。

「どなたかわかりませんが、ありがとうございます。夜も更けておりますが、心ばかりのお礼をとも考えております。失礼ですが、今日はこのような時間からご自宅へお戻りですか？」

「あの。いえ、どこかへ泊まります」

身も知らない人へ正直に答える必要などなかったが、逆に嘘をつく理由もないので華絵はありのままに答えた。
「そうですか。それなら、もしあなた様が宜しければ一晩お部屋をご用意させていただきとう存じます」

――何か、言葉がヘン。

「あっ、いえそんな。めっそうもございませぬ」華絵の方までつられてもっと妙な言葉になってくる。
「どうか、遠慮なさらずに……」　華絵はその男の言葉に甘んじることにした。男は、どうぞ、と促し、彼女を奥の応接セットへと導いた。
熱い紅茶が出てきて、男は聞かれもしない、この家のことを勝手に話し出した。
この家の主人は大手商社の社長、会長、取締役相談役を経てその後現役を退いているという。話す男は、執事長で、家には執事が三人、それにメイド三人の六人が常駐している。主人の妻は五年前に癌で亡くなり、もともと子供がいないので今は主人一人だけだという。
華絵はあれ？　と思った。

――？　やっぱりピロミクンはこの家のご子息じゃなかったのか。

「ご主人様が弘道様にお会いしたいとおっしゃられて今こちらへ参ります」先ほど毛布を持ってきた男が執事長へ伝えた。
再び、華絵はあれ？　と思った。

――？　ヒロミチクンて、多分ピロミクンのことだ。やっぱりこの家の主人と深い関係にあるんだ。

執事長は眉間にしわを寄せ、露骨に嫌そうな顔をしたが、主人が車椅子で部屋へ入ってくるなり、優しい造り笑顔になった。
主人はガウンを纏って車椅子に乗っていたが、恰幅のよい体格はその状態でも容易に見て取れた。しかし次の瞬間。
「洋子！　洋子！　お前やっぱり生きていたのか！」
華絵は自分が突然ヨウコと呼ばれ、驚いて執事長の方を見た。執事長は哀しそうに首を横に振って小声で彼女に囁いた。
「お亡くなりになった奥様のお名前です。はっきりとご否定をされませんとあとあと面倒なことになります」
何やら訳がわからないが、ともかく華絵は言われた通りにすることにした。
「いいえ、私はそのヨウコさんではありません」
「いやいや、洋子だ。その髪型、太ももは絶対洋子だ！」

――肝心の『顔』が抜けてるじゃん。

「洋子。おまえ。また髪を洗ってあげよう。おい、執事。いつものシャンプーを持ってこい！」
「ちょっ、ちょっと。髪洗うですって？　今ここで？　やだあ」
執事が不愉快そうに言った。
「そこじゃない！　問題は……。あなたが『奥様じゃない』というところだ！」
「ああ、そうだった。あの私奥様と違います。人違いです」
「いんや。おまえは洋子だ。そのでかい尻が何よりの証拠だ」
「何ですって？　失礼な！　お尻が大きくて悪かったわね！」
執事がますます不愉快そうに言う。
「だから、話、そっちへ行くなって！　ああ、もうダメだ。もう当分戻らないぞ」
「戻らないって、何が？　私何かドジ踏んだ？」

13

執事長が合図をすると、他の執事の一人が『しゃんぷー』と書かれたケースを持ってきた。どうもたった今、紙にマジックで書いてケースに貼り付けたような感じだ。

執事はケースから注射器を取り出した。その注射器にも慌てて書きなぐったような『しゃんぷー』と書かれた付箋が付けてあった。執事は主人の背後へ回り、後ろから首筋に注射針を立てているようだった。その瞬間主人は目を閉じて首をくたっとうなだれた。

「ちょっと。何してるんですか！？」

「瞬間麻酔薬です。命に別状はない。体に負担が掛からないように弱くしているので、二～三分しかもたない。さあでは、話の続きをしますから」

――要らないよ。この家の話なんて。興味ないもん。

執事は話を再開した。

主人の夫婦には子供がないので、十年前に等身大のロボット人形を特注で造らせたという。その人形はかなり精巧にできていて、平地ならば歩けるし、簡単な動きもする。自動的に最も近くにいる人間の目を検出して、そちらに視線を向けることができる。皮膚や顔などは、一見するとロボット人形には見えないほど造りに手間が掛けられたものだという。言葉に反応して会話は出来ないが、『こんにちは・いただきます・おやすみなさい』などの簡単な挨拶や『はい・いいえ』はリモコンスイッチで操作できるという。

ところが、五年前、妻が亡くなったときに、主人の気が狂って、ロボット人形を本当の自分の息子だと思うようになってしまった、という。しかし、そのロボット人形は表情がうまくできない。喜んだ顔もみせない。子供らしさもなく、それ以前に人間らしくもない。

このため、二年ほど前から主人は感情を顔に表さない無表情なロボット人形にときどき腹を立てるようになり、人形をステッキで激しく叩いたりするようになった、という。
華絵はちょっと混乱した。そのロボット人形、自分のなかで、ピロミクンとイメージがついつい重なってしまう。しかし、ピロミクンは人間だ。執事長の話はさらに続いた。

「あまりに主人が激しく叩くためか、弘道と名付けられたそのロボット人形は回路が少し狂ってきて、昼夜を問わずときどきリモコンが指示することなしに家の外へ歩いて行ってしまうようになってしまいました。ロボット人形は家を記憶していて、時間が経過し過ぎると自動的に家に戻ってくる回路が働いていて、長くても丸一日家から離れているといつも戻ってきます。ですから、敢えて捜し回ることはしていませんでした。ところが、今回は丸三日近く戻ってこなかったので、てっきりどこかで壊れているのだと思っていました」

華絵は、背中がぞくっとするのを感じた。そして、ピロミクンの寝ている方へ向き直った。ピロミクンは掛けられていた毛布を床へ落としてその場に立っていた。その顔はピロミクンの顔に似ているが、明らかに人形だ。人間でないことだけははっきりとわかる。

――ピロミクンじゃない。すり代わってる。ピロミクンどこへ行った？

華絵は玄関を開けて周りを伺った。暗闇にピロミクンの姿は見えない。近くにはいなさそうだ。華絵は、外に待たせていたタクシーにはっと気がついた。

――あっ、タクシーのこと忘れてた。

華絵は車に近寄り、運転手に窓越しに聞いてみた。
「ねえ。さっき運んでもらった青年、出て行かなかったですか？」
すると運転手から意外な言葉が返ってきた。
「はあ？　青年？　ああ、あの人形ですか？　さっき家の中にそこのおやじさんが入れてたじゃないですか……」
――！！
華絵は唖然として声も出なかった。
――うそだ！　絶対ロボット人形なんかじゃない。私とたくさん会話した。スタジオでも頑張ってた。夢も語っていた。映画にもエキストラで出たって喜んでた。うそだ！　うそだ！　有り得ない！
ピロミクン。人形でないあなたは今どこにいるの！？

14

「あの、あとどのくらい待ちますか？」と運転手。
「もう少し待っててね」と華絵。今の彼女にとってはタクシーをどうするか、など二の次である。

華絵が再び主人の家へ戻ると、そこでは目の前でとんでもない光景が展開されていた。
麻酔が切れて意識を取り戻した主人が、ピロミクンに似たロボット人形を先の鋭いステッキでずたずたに刺していたのである。
「やめて――！」
慌てて止めに入る華絵。ステッキを掴み、力いっぱい引いてそれを取り上げようとした。しかし主人は足が悪いだけで、むしろ毎日車椅子を手で転がしているため、腕の力は華絵と比べ格段に強かった。あっという間に華絵の手はステッキから引き離され、主人はそれを大きく後ろへ引いた。
「洋子。おまえいつから私に逆らうようになった！　上等だ！　ほれ、お仕置きだ！」
ビシッ！！
ステッキは物凄い勢いで華絵の尻にヒットした。
ビシッ！　ビシッ！　ビシッ！！　ビシッ！！
「きゃあ、ひい！」
ビシッ！　ビシッ！　ビシッ！！　ビシッ！！
「ぎゃあああ！」
そこにいた執事たち三人。誰も止めるものはいない。辛そうな顔をしながらも皆俯いたままだ。
正確に同じ場所ばかり叩くので、華絵のスカートは擦り切れてぼろぼろになった。しかしそれでも主人はその場にうつぶせに倒れこんだ華絵の尻を、今度は真上から勢いをつけて叩き続ける。

ビシッ！　バシッ！　ビシッ！！　バシッ！！
「ぎゃあああああ！！」
そのときである。
突然ステッキの動きが止まった。ステッキの先の方ががっちりと握られている。その手はピロミクンに似たロボット人形のものだった。
「！！」
「ぐうう！」主人は力一杯ステッキを引くが、ロボット人形の手はぴくりともしない。物凄い力である。
ロボット人形は既にずたずたに刺されていて、中の配線やそれを保護しているビニールやらゴムやらがとび出ていて、動いていること自体信じられないような状態である。
華絵は痛さのあまり涙でくしゃくしゃになった目で、ロボット人形の方を見上げた。
それは、今まで彼女が人間のピロミクンにも一度も見たことのない、悲しそうな顔をしていた。そしてその目からはついに涙が流れ出た。主人は信じられないものを見るように唖然としている。そして諦めてステッキを持っている手を離した。
ロボット人形は、ステッキを木製の壁に向かって投げつけた。
ビシッ！　それは大きな音をたてて壁に深く刺さった。

15

ロボット人形は華絵の横に手をついて四つん這いになった。そして……。

そして突然、破れかけたお尻を振りだした。

――！！　ええ？　サバンニャ？　ピロミクン。あなたどうしてサバンニャの癖を知っているの？

――そっ、それとも……。あなた自身、サ・バ・ン・ニャ！？

「サバンニャ！！」華絵は思わず大声で叫んだ。

ロボット人形の顔は打って変わって歓喜の表情になった。それは明らかに『生きているもの』の表情だった。

華絵はロボット人形の腕を掴み、彼を引き寄せ抱きかかえ、そして熱い口づけを交わした。ロボット人形の目からは涙がどんどんと流れ出てくる。どんどんと人間のような表情が表れてくる……。華絵はそこにこころが存在していることをはっきりと認識した。

ついに、ロボット人形は『みゃあみゃあ』と嬉しそうに鳴き出した。

華絵も、かつてサバンニャと遊んだ時のように、みゃあみゃあと鳴いてお尻を左右に振る。

鳴き合う、いえ、泣き合う華絵とサバンニャ。

――私に会いにきてくれたのね？

サバンニャに表情が表れてくるのに反比例するように、なぜか華絵の意識が薄れていった。

そしてついに華絵はその場にぺたりと床にうつ伏せになり、動かな

くなった。
「大丈夫ですか？」の執事長の声が華絵の耳に遠くの方から聞こえる。
そして空気がとまった。

16

抱き合いながら、気が付くと二人はサバンナ草原の中にいた。二人ではない。二頭である。

仲睦まじくじゃれ合う二頭のオスメスライオン。

華絵は自分がメスライオンであることに気が付いた。脇にいるのは大きなたてがみの立派なオスライオン……。

――あなたは誰？　サバンニャなの？

「がおう！」

それは『みゃあ』ではないが、サバンニャの返事であることにもはや疑いは無かった。

――あなたは猫じゃなかったの？　ライオンだったの？

――ライオンの魂を持った猫？　どうして？

「がおう！」

――サバンニャ。あなたを動物病院に連れて行ったとき、獣医先生は、太りすぎです！　と言ってたよ。メタボ猫ですって。今のあなたの、オスライオンの姿もかなりメタボだよ。

「がおう！」

「がおううう！（でも、メタボのあなたが好き！）」

「がおう！」

華絵は、自分の『こころ』を取り戻すために家を出たことを思い出した。

――幸せ……。私には、はっきりと『こころ』がある。ロボットなんかじゃない。生きている。そして、あなた。サバンニャも生きている。生きた『こころ』を持っている……。

「がおう」、「がおう」。幸せの極致。そして絶頂。

二頭はどちらからともなく、愛の交歓を始めた。

メタボライオン、サバンニャは、そのパワーを全開した。

百獣の王。ライオンの愛の交歓は半端なものではない。飲まず食わずで数時間から丸一日、『愛の交歓』を繰り返す。その間、少なくて十数回から普通は三～四十回程度。記録上最も多いもので連続百回を超えるものも確認されている。

しかし、このケースでは、もしかして観測記録を上回ってしまったかもしれない。

17

華形満夫が勤める会社では、緊急臨時取締役会が行われていた。
内容は、満夫が経理部長と共謀し、数億円余りの会社の金を横領していたことが、その会社の役員秘書の内部告発により発覚したためだ。
秘書の名は華形華絵。満夫の妻である。その秘書は、先週金曜日に告発文とそれを裏付ける証拠書類を社長室に置いたまま失踪し、一度家へ連絡があったきり、未だにその行方はわかっていない。
会社は刑事沙汰になることを怖れ、華形満夫の解雇により事を隠蔽しようとしていた。
ところが、会社は、秘書の告発文と証拠書類の写しが、検察庁と国家公安委員長宛に送付されていることを知らない……。
まもなく、華形満夫と経理部長が逮捕され、新聞紙面を賑わすことは確実であった。

18

アフリカ大陸のとある地。
猛獣の密漁実態の取材にきた日本人ジャーナリスト二名と、彼らを案内する現地人。それに通訳の四人がサバンナ草原を車で移動していた。
一頭のオスライオンと数頭のメスライオンが昼寝をしている様子が近くで見られる。現地人が通訳を介して説明を始めた。
「あのオスライオンと端にいるメスライオンの親は、十年前に非合法な密猟組織に導かれた日本人に撃たれたんですよ」
「そんな前の話……。最近の話でないと記事としては価値がないんですけどねえ」
「でもね。その猛獣狩りが趣味という日本人。いつも家族でやってきては結構な数のライオンを撃ち殺してましてね。あそこの親ライオンをオスメス両方しとめたときなんか、家族そろって歓喜してましたね」
「だから、そんな昔の話はいいよ」
「いやいや、聞いてくださいよ。続きがあるんです。その日本人ですがね。全部剥製にして持ち帰り、日本国内の政治家やら、官僚にばらまいているようなんですよ。それって、スキャンダルとしては面白くないですか？」
「ああ。いいネタだけど、相手が悪いや。大物政治家だったりしたら、こっちの首が飛ぶからね」
若いジャーナリストはそれを聞いて言った。
「念のため当たってみましょうよ。ここまで来て収穫なし、は嫌ですよ」
「その日本人の名前とかわかりますか？」
現地人は急に顔色が良くなった。

「もちろんですよ。ニホンの有名な企業。というか、世界のトップ企業の経営者ですからね」
「どこの誰ですか？」
「ミスターハナガタという男です。マンタロ・ハナガタ」
サバンナの夕日は特大サイズである……。
昼間あれだけぎらぎらと地面を照りつけていた太陽も、今や陽炎の向こうに揺れている。
そして、まもなくそれは地平線に沈み、辺りは一斉に夜を迎えるのである。
＜こころの絆＞　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5910t/

こころの絆

2011年5月27日20時10分発行